

令和7年2月10日
黒田インターナショナルコンサルティング LLC
黒田 毅

一切の無駄を排除した企業の構築は、絶対的な企業の強さを与えるものである。

これらが企業の戦う環境である。それにおいて効率化、システム化、生産性の向上、ITシステムの構築を実現することは、高い利益という企業経営の絶対的な健全性の実現を可能とできるのである。

これらが、世界におけるトッププレゼンスとメジャーにおける企業基盤なのである。それに比較するとき、日本企業の弱さがわかるのである。

これらが資本力と技術力を有し、グローバルスタンダードの形成を有するのである。それらが企業における現実であることは正しい現実への認識である。

そのためこれら生産性と効率性、資本力と製品力における対等性の構築が、企業における必題として要求されるのである。

これらがグローバルスタンダードという黒船の正体である。

そのため企業はこれら基準における企業転換において、世界との対等性を有することは可能であり、今日において、それらは不可避の要求であることは理解できるものである。

また独自性やより優れた技術は、未来における可能性そのものである。それらは過去における企業の研究開発や努力が未来における可能性を有することなのである。

またこれらは企業のシンプル化とスリム化であり、これらが、ITシステムにおける高い効率化を実現し、高い収益性を与えることは理解できるのである。またこれらが企業環境がフレキシブルな企業行動を可能とできることは日本企業は理解すべきかも知れない。

また西洋社会における競争原理への理解は正しい世界への理解を与えるものである。共存と共生という日本の村社会の原則は必ずしも同じでないのである。

それらが西洋のプレゼンスにおけるグローバリズムの形成なのである。それらが閉鎖された日本の経済に対して、黒船としてやってきているのである。

日本企業は二つの選択がある。西洋陣営と同じ現実を行うのか、独自バックグラウンドとルールにおける自己を行うのかである。

結論を伝えれば、より優れたものを選択すべきである。また従属性は決して現実に勝ることはできないのである。

これらは日本的経営システムの長所と彼らの有する創造性や挑戦など既得権益を離れた自己など、企業がその長所を吸収し自己を行うことは必ず可能なのである。